
障害者

ちびせいたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

障害者

【Nコード】

N2239B

【作者名】

ちびせいたん

【あらすじ】

障害者が自分と向き合い、生きていくのは彼がいたから。

自分と向き合う(前書き)

作者の気持ちを話しています。変な目で見ないで下さい。

自分と向き合う

やすしからの手紙にせいの事を1度も障害者って思った事なんてないよ。って文を私は何回も読み直した。

そして、気が付いた！自分が1番、障害者に偏見を持っている事にやすしと付き合ったのは、今から約、半年前のリハビリ専門の病院を退院する少し前だった。『せいこの事が好きだ。付き合っただけだ。』

『これオレが大事な人が出来たらあげようと思ってた指輪。』やすしはそう言っただけに私に銀細工のピンクの石の入った可愛い指輪を私の右の薬指にした。

私はやすしに車椅子を押ししてもらい病室に帰った。

私は部屋に帰って着替えてから看護師を呼びベットに入った。

ベットの中で右の薬指の指輪を眺めて考えた。今、付き合ってる彼は五年も付き合っていて、大好きで、本当だったら、今年の夏に婚約をする予定だった。でも、私の事や自分の事、親の事を悩ませてしまっている。うつ病になったのだ。これ以上は大好きな彼を傷つけないでほしい。

私がいなければ。

でも、私も1人でこれから生きていくのは辛い。

やすしと付き合う。か…。

好きでもない人と付き合うなんてできない。ましてや、苦手な人だった。

でも…。でも…。

これから1人はイヤだ…。

ああ、今、付き合ってた人がもつと心が強かったら。なんで私だけこんな悲しい事が起こるのだ。

そうだ……。いろんな人の意見を聞こう。看護師さんやリハビリの先生、心理の先生、いろいろな人に自分の気持ちを話した。

話をしているうちに答えが出てきた。

やすしに本当の事を話してみよう。受け入れてもらえたら、付き合いおう。

自分と向き合う(後書き)

彼、やすしとの出会い。

運命の彼氏（前書き）

彼氏と付き合っキツカケ

運命の彼氏

やすしに自分の本当の気持ちを素直に話す事にした。

やすしがお見舞いに来た。

リハビリをする部屋に一緒に行き、リハビリする私を部屋の隅でじつと、見ている。

リハビリの先生に『告白されたって言うのはあの人だよ。』って小さい声で私はいろいろ話をする同い年のリハビリの先生にやすしを教えた。リハビリを終わって、部屋に帰る時もやすしは私の車椅子を押してくれた。

部屋に帰り、少し2人でたわいもない話をしているうちに、夕飯の時間になった。

やすしは食べる、私を待つてると言う。

私は告白の答えを聞く気だなあ。と思った。私は急いで、夕飯を食べて、廊下で待つ、やすしの元に車椅子を走らせた。『ごめんね。待った?』と私。

『ううん。大丈夫だよ。』とやすし。

『向こう側に行こう。』と私。

少し病室から離れた、廊下のベンチにやすしは座った。『あの…告白の答え…』とやすし。それをさえぎるように私は『まだね…前の彼氏の事が好きなの…。でも…これから1人で生きていくのは辛い…。支えてくれるなら…付き合う…。』

せいっぱいの気持ちを言った。障害をもった私が他の男を好きで、

支えてくれ。って都合のいい話を受け入れてくれる訳がない。これで、終わる。私には、この先、付き合える人なんていないんだ。障害者を彼女にする人なんていないんだ。そう、心の中で思ってた。

『いいよ。支えるよ。』意外な答えがやすしの口から出てきた。

私はキョトンとした。やすしは私の右の薬指の指輪の傾いたのを直して、『また明日も来るよ。そろそろ、部屋に戻ろうか。』と言った。

この日から私達は付き合う事に事実上なったのだ。こんなにあっさり受け入れてくれるなんて…。と私の心は複雑だった。でも、今、考えたらこれで良かったのだと思う。やすしの心のキャパの大きさに今は感謝している。

元彼との別れ（前書き）

大好きな元彼との別れ

元彼との別れ

退院の日が決まった。私は付き合ってる人と別れる事にした。

今、考えるとやすしに言う前に元彼に別れを告げたのかは、私の中で、グチャグチャなのです。これも、脳の病気をしたせいです。決して。私がいい加減な訳ではないのです。

多分ですけど、元彼と別れてからやすしの告白を受けたのかもかもしれません。

ちぐはぐで、すみません。

とりあえず、5年を一緒に付き合ってきた元彼の話をしませぬ。

私が、19才の時にお酒を飲んでる席で会ったのが初めてなんです。その後、元彼のアタックで私は落ちて、付き合う事になったのです。その、1年後には、アパートを借りて、2人で暮らすようになりました。スツゴク、お互いに好きで、必要で、いつも一緒でした。そんな元彼となぜ私は別れたのかと言うと、好きだからです。皮肉にも元彼は子供の頃にもやもや病と言う脳の病気をしています。それで、また、いつ再発するかわからないと言う不安にあって、私が脳の病気で倒れて障害者になり、一生その私を見ていかない、って言う責任感。私のまた、再発したらと言う不安。私の親からの重圧。で、優しい元彼の心は押し潰されました。その結果が、うつ病になってしまいました。私は大好きな人が私の事で悩み、病気になるのが辛くって、私には絶えられませんでした。

いくら、5年を一緒に過ごして、気持ちが変わる彼でも、閉じてしまった心の扉が今回は重かったです。不自由な体でも、心は元彼を助けたいと思うのです。

だから、辛いけど、別れる事を決心したんです。

私なりに頑張った。
(前書き)

本当なんですよ。

私なりに頑張った。

退院する日が決まった。

が、私の調子は良かった。車椅子から離れて4本杖で少しずつだが歩き出したのです。

それには、リハビリの先生方も主治医の先生も驚き。話し合いがあった。みたいだ。

それで私は退院するのが約1カ月、延びたのだ。私も、家族と話し合い。と言うかほぼ、言われ放しだったが……。ここで頑張れ！歩けるようになれ！って。

私も自分を奮い立たせるために、お母さんと目標を決めた。まずは、トイレの自立に着替えの自立、少しの杖歩行だった。私は意地で退院までにそれを全てクリアーして退院した。初めて、杖で1人で歩けた時の感動を話します。

麻痺した左の足にはプラスチックで作った装具をつけて、足を固定する。でないと、くにゃくにゃと足が曲がってしまうのです。信じられない話でしょう？でも、本当なんですよ。

麻痺していない元気な右手には下が4本に分かれて安定感がある杖を持ちます。

リハビリの先生が体の腕や腰のあたりを掴みます。

それで、歩くのです。

怖いけど、歩くのです。

でも、先生が掴んでることが唯一の安心なんですよ。

それがなくなっただのが初めての私、1人の自立の歩行なんですよ。思わず、泣きました。近くにいた知らない同じ病気の家族を持つ人なんて、良かったね。って言って、泣きながら近づいてきたんです。

歩くなんて、今までは当たり前だったのに。この時は、奇跡が起ったのかって言うぐらいに私は感謝しました。それからのリハビリは歩くのが楽しくって、いっぱい歩きました。いっぱいって言うても、元気な人なら、数秒で往復する距離だけ。

私には、長いのです。

次のトイレの自立にはちょっとした笑い話があります。

私が入院していた病院の私のいた棟にはトイレがよく言う障害者トイレのように手すりがあります。呼び出しボタンもあります。

オシッコをしたくなったら、トイレに行き、ボタンを押します。もしたら、看護師が来て、立った私のズボンを下ろします。それから用のをします。

トイレの自立の時は、いつものように看護師を呼んで、看護師こう言いました。『横にいるから、自分でズボンをおろしてみ、何かあってもスグにいるから。』と言うとカーテンを閉めて行ってしまいました。

私も意地になって、怪我したら、困るのはアイツだから。って気持ちでズボンをおろし初めました。その時、バランスを崩して、おぶつ入れを蹴ってしまいました。音がトイレに響いても看護師は来ません。

とりあえず、ズボンをおろせたので、便器に座り用をしても看護師は来ません。仕方なく、また、ズボンをあげて、車椅子に乗り換えしました。

トイレから出ると、そこには看護師はいないので。

私は騙されたんです。

でも、そのおかげで、トイレはそれから自信がつき自立しました。

ちなみに、看護師はナースステーションで大笑いしてました。今は感謝してますが、あの時は、腹が立ちました。

つらい。

退院したのはいいが家に帰ったのは何年振りの事だった。元彼と一緒に暮らすのに家を出て、病気で帰って来たのだ。

何か情けなくなったのだ。家を出た理由はもう一つある。

兄が結婚してお嫁さんを連れてきたのだ。

小姑が居ては嫌だろうと思ひ、家を出たのもある。その気持ちを知ってか知らずか、至って、姉は障害者になった私に厳しい。

厳しいと言うよりも冷たくなったのだ。

人なんてこんなもの…。

本当に、私自身が好きなら、障害者になっても受け入れてくれるが、そうでなければ、私の前からは去って行くのです。こんなものだった。1人で今まで私は人から好かれてると思っていたが、他人が怖くなったのだ。信じらんない。信じられるのは親と兄とやすしだけだ。なんて、私は寂しい人生だったのだろうと思って、この頃からだ死にたいと思うようになったのは。姉のせいだと思う。姉は自分が機嫌がいい時は私が元気だった時のように優しく接してくれるが、機嫌が悪い時は私が元気だった時のように姉は自分が機嫌がいいと私の病気の後遺症の左反則無視による洗面台の汚した後の拭き残しに文句をつける。

出掛けた時の事などいろいろ姉には嫌な思いをさせられたが、なんせ、不自由な体で家に出戻りした身なのに加え、姉は妊娠中だった為、私は何もかも自分の中にしまいガマンした。家でずっと何もしないで過ごしても、と言う事みたいで、私は近くの施設に週2日だけデイサービスに行つて、リハビリし、風呂に入りに行つた。

最初の目的は風呂だった。24才の女の私は風呂に本当だったら毎日、入りたいのだ。体が不自由になってからはそんなには毎日、入

りたいとは思う事はなくなったが、やはり風田は好きだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2239b/>

障害者

2010年10月10日04時00分発行